

# 『文豪たちの友情』

石井 千湖/著（新潮社）

友情の形は人それぞれ。自他共に認める仲の良い友情もあれば、愛憎入り乱れ喧嘩が多い友情も……本書には、明治・大正・昭和の文豪たちのさまざまな友情が、文豪の手記や作品、周囲の人の証言を交えて紹介されています。例えば、雑誌に掲載された詩の感想を送り合い、文通から始まった萩原朔太郎と室生犀星。二人が初対面で互いに抱いた印象は、作詩と作者の風貌があまりにかけ離れすぎて最悪だったとか。また、夏目漱石の「漱石」というペンネームは、元は正岡子規の雅号の一つだったそうです。他にも、別の友人宅に遊びに行っ、自分に電話をかけてくれなかった志賀直哉に、武者小路実篤はこんなハガキを送っています。「僕はおこってゐる、ほんとおこってゐる、あとで電話をかけておこるが、今はハガキで怒る」。

名だたる文豪たちが、とても身近に感じられてくるエピソードが満載の1冊です。

# 『サロメ』

原田 マハ/著(文藝春秋)

事の起こりは現代のロンドン。19世紀末イギリスで活躍した挿絵画家、オーブリー・ビアズリーの研究家である甲斐祐也は、作家オスカー・ワイルドの研究家ジェーン・マクノイアから、新発見の『サロメ』の挿絵を見せられる。それはサロメが預言者ヨハネの首に接吻する、有名なクライマックスシーンの挿絵だった。

しかし生首の顔はヨハネではない。一体誰の顔なのか？ そして物語は19世紀末のロンドンへ。幼い頃から病弱だったオーブリーはオスカーに才能を見出され、『サロメ』の挿絵で一躍時の人となる。しかし二人の関係は、オーブリーの姉メイベルや、オスカーの恋人アルフレッドを巻き込み、四つ巴の愛憎関係に発展してゆく……

キュレーター出身の著者が描くアート小説は、予備知識がなくとも楽しめ、本作も気付けば物語の世界に引き込まれている。気になった方はぜひ、戯曲の『サロメ』も併せて読んでいただきたい。

# 『バイバイわたしの9さい』

ヴァレリー・ゼナッティ/作 伏見 操訳/訳 (文研出版)

無性に何かをはじめたくなる。そんな物語に出会いました。

もうすぐ10歳になるタマラは、焦っていました。この世は不幸であふれかえっている。飢餓、貧困、異常気象……こんな状況、誰も教えてくれなかった。私は、どうすればいいのか。そこで、彼女は大統領になることを思いつきますが、15年かかることがわかり、そんなに待てないと別の方法を模索します。

10歳らしい発想に目を細める場面も多々ありますが、自分の考えをノートに書き、頭の中を整理する。本やインターネットで調べ、時には周囲にアンケートをとる。そして、また考える、といった大人顔負けの行動力も見せます。いや、大人でもここまで情熱をもって取り組める人がどのくらいいるのでしょうか。読んでいくうちに、彼女の行動がどんな結果をもたらすのかページをめくる手が止まらなくなるにちがいありません。

# 『ねえさんの青いヒジャブ』

イブティハージ・ムハンマド、S・K・アリ/作  
ハテム・アリ/絵 野坂 悦子/訳 (BL出版)

みなさんはヒジャブって知っていますか？ ヒジャブとはイスラム教の女の子の人が髪を覆い隠すのに使う布のことです。この物語は主人公の女の子ファイザーのねえさんであるアシヤが、初めて学校にヒジャブをつけていく日が描かれています。新学期、海のような空のような青いヒジャブをつけて登校するねえさんの姿がファイザーは誇らしくてたまりません。ところが、そんな二人を待ち受けていたのは心無い笑い声でした。ヒジャブを指さしてげらげら笑う声。果たして、ねえさんとファイザーはそれらに対してどんな行動をとるのでしょうか。

作者のムハンマドさんも子どもの頃から大人になるまで、ヒジャブの事だからかわれたつらい経験があります。宗教や外見で人を差別するべきではないと考え続け、活動をしているムハンマドさんの体験にもとづいたおはなしです。